

どれみなのはなし

そのよん



きんどんてい にゃんこう
金井亭 猫好

もくじ

まえがき

しあわせ	もちちゃん	………	3
しあわせ	もちちゃん	のこと	10
とおいそら	ちかいそら	………	11
とおいそら	ちかいそら	のこと	37
あとがき	………	………	38

TVアニメ『おジャ魔女どれみ』の本も四冊目になりました。

世はすでに『ドツカ〜ン!』一色ですが、この本はいまだに『も〜っと!』のままです。と、いうわけで、主要人物5人です。大きなハナちゃんも小さなハナちゃんもいません。

そして毎度ながら、恥ずかしいのが苦手な方はすぐ本を閉じたほうがいい話ばかりです。

それでも構わない方、ようこそ
『どれみはなし』そのよん、どつぞご覧くださ
いませ。

酒処金井亭 亭主敬白

イラストレーション………
久遠一海

3 しあわせ ももちゃん

しあわせ ももちゃん

「もうすぐ、1年だね」

お姉ちゃんがいきなりそう言ったから、みんな、えっ、って顔でこっちを向いた。

「お菓子屋さんはじめてさ」

2月もはんぶんまで来たけど、まだまだ寒い日。お姉ちゃんたちといっしょに、MAHO堂に行くうちゅう。

「そっやって、ととつに話変えるくせ、やめてっ
てばー!」

あたしも、もう1年も『お姉ちゃん』って呼んで
きたけど やっぱり、どわみはどわみだ。

「ぼつぶちゃん、そっ言わんと。いつものことやん。

そやなあ。料理だけでええかと思てたけど、お菓子もできるよつになると、結構おもしろいもんやっ
たんなあ」

「あいちゃん、もう無敵ね」

はつきちゃんがそっ言いなながらMAHO堂のとびら
を開けると、キッチンの中からなにか聞こえてきた。

「フン フフフン フーンフフン
はなつた?」

「あ、ももちゃんもう来てたんだけ」

おんぶちゃんが中に入って、

「ずいぶん早いわね、ももちゃん」

「フフフン フフン フンフーンフフン」

声かけたけど、ももちゃん、はなつた歌ったまま。

「あら?」

そりゃそっだよ。だって

「ねえ、なんだかももちゃん、変じゃない?」

あれれ?? あたしには、はつきちゃんがなに言
ってるのかわからなかった。だって、あそこにいる
のって

そっ思っていたところに、

「入り口で固まって、みんななにしてる?」

つて声が出た。みんながぱつ、とふり向いたら、そこにいたのは買物ぶくろ持ったももちゃん。

「なにって え？あれ？？」

「それじゃあ、あそこにいるのは」

「二二よ。わからなかつた？」

そうそう。そんなの見ればわかるじゃん。もう、みんなふだんは外見しか見ないんだから。

「Thank you二二 じゃあ交代ネ」

ももちゃんがキツチンに飛び込んだあとを、みんな笑いながら追いかけてく。

でも、さつきももちゃんちょっとだけ、ふう、って息ついてた。あれって ため息かな？

つぎの日は日よつび、あたしがMAHO堂に行ったら、やっぱり先にももちゃんがいた。

「ももちゃん、おつはよあ〜」

「あ、ぼつぷちゃん」

ももちゃんは昨日とおなじで、何か作ってるみたい。

「ももちゃん、なにやってるの？」

「お菓子のおさらいヨ。いつも同じのばかりだと、忘れちゃうカラ」

そっかあ。同じ5年生でも、こうもちがうんだよね。ふくん。やつぱさ、ももちゃんって、お姉ちゃんと違って、しっかりしてるよね。」

「そうじゃないヨ。もう1年もたつのに、日本語もちよっとしか上手になってないし、ネ」

そっか、ももちゃんと会って、もう1年なんだ。

「そうネ、ちよっと考えちゃうワ。1年で変わったト、ないのかなあ、ッテ」

あらら、またため息ついちゃって。ももちゃんでも、そんなこと考えるんだあ。でもさ、

「あるよ」

思わず口からこぼれちゃった。けどほんと。まちがいないもん。

「あるよ。そりゃあもう、ずっと、ずっと変わったよー」

「Really? ほんと?」

「わかんないかなあ? あ、そうっだ♡」

「あ〜っ! 信じてないんだ」

「ううん、そんなことナイけど」

「だったら、しょうこ見せたげる。い〜いこと思いついちゃったから」

「MAHO堂におぼけが出るんですって?」

「はつきちゃんの声が、MAHO堂のドア越しに聞こえた。」

「うん。わたしも聞いた。ぽっぷちゃんでしょ?」

「おんぷちゃんの声だ。そうそう。みんなに話してまわったのは、あたしだもんね。」

「そうそう。あいつ、なんかたくらんでんだよね」

「どれみ、覚えてなさいよ。」

「まあええやん。もともとお化け一匹飼ってるようなもんやしな〜」

最後にあいちゃんの声。くふふふ。来たきた。

あたしはキッチンの影にかくれて、みんなをまっただ。

ドアがちよつとづつ開いていく。

あたしは後ろにかくれてるももちゃんに、ちいさな声で合図した。

「それじゃ、いっくよあ〜!」

「ぽっぷ、ぽっぷっ! まったく、あいつ人を呼び出しといて、どこいったん」

それっ!

あたしとももちゃんが小さくとなえた魔法が、MAHO堂にひろがった。

とたんに

「ぶへへっっ! なにこれ!!」

目の前ぜんぶまっしろ。ちょっと先までしか見えやしない。

「あいつつう〜 こおらあ、ほづぶ！ いるのはわかってんだから、早く出て来おい!!」

さあて、ドアを開けて、と。作戦開始!!

「これじゃ、まわりに何があるかわからないわ」

「おんぶちゃん、そっちたしか柵よ。気をつけて」

「あれ？ いまわたし呼んだの、はづきちゃん？」

「あ、あら？ じゃ、ここにいるのは」

「あたし、なんだけど」

「あ、ど、どれみちゃんも、気をつけてね」

「はづきちゃんあ〜ん？」

くふくふ。やってるやってる。とりあえず、成功つと。

「ちよっと、集まってんか。これじゃお互いぶつかっ

てまうわ」

よあし、それじゃ

あたしは、ももちゃんの手を引きながら、あいちゃんの声のする方に歩いていった。

「やあつと集まったみたいやな」

「あの、5人ちゃんという？」

「5人…いるやる？」

「なんだか、さっきから一人多いような気がするんだけど…」

「な、な、ちゃんと数えてみよ

ひい、ふう、みい、よあ ほら、5人や。おどかしこなしやで、はづきちゃん」

「え？ う〜ん ほんとに、みんないるわよね？」

「いま数えたやん。心配性やなあ。それやったら、ひとりづつ名前言つてたらええやん。」

ほら、おんぶちゃん、どれみちゃん、ももちゃん、はづきちゃん、ほいであたし、と」

「そ、そうよね。どれみちゃん、あいちゃん、おんぶちゃん、ももちゃん、それで、あと私、と。だいたいよぶ、ね。ね」

「二人とも、ちよつと待って！」

大声にびっくりして見てみたら、おんぶちゃんが青い顔で立ってた。

「なんやねん、いきなり」

「あいちゃん、いま『あたし』って、こつち指さしてなかった？」

「へ？」

「はづきちゃんも！『私』って言いながら自分のことさしてなかったじゃない!!」

「いま話してるのって、おんぶちゃん？」

ぼそぼそって、いつもと違うお姉ちゃんの声。

「そつよ」

「あのさ。なんであたしの服着てるの？。頭もおんどだし」

「なに言ってるのよ。わたしはいつも通り」

「みちゃんこそ、なんでわたしと同じ髪形なの？服も着替えちゃって」

「うあ！み、みんななんであたしの服着てるん？どれみちゃんも、ももちゃんも髪の毛短かくなって」

「ちよつとみんな落ち着いてえっ!!」

しゅん、と静かになっちゃった。さすがはづきちゃん。

すうーとおもいきり息を吸う音がなんだかしてから、

「いい？私の目の前に、私が4人いるわ。みんなもそうじゃない？」

「そや。あたしの目えが間違ってるんか思たけど」

確かに、あたしや。あたしが4人いるで」

「わたしも、そう見える」

「あたしもだよ。服だけじゃなくて、顔も髪の毛もみんなあたしだ」

「だから、ね。これって、魔法じゃないかしら？」

うーん。やっぱり最初に気がつくのははづきちゃんかあ。

そう、あたしももちやんで、みんなが自分と同じになる魔法と、方向がわからなくなる魔法かけたんだ。これなら、だれがだれか、ぜんぜんわからなくなる。と、思つてしょ？

「そつえば、さっきからももちやんの声がしないわね」

「ほんまや。もちちゃん、どこや？」

「みんな同じに見えるから、だれがもちちゃんかわからないよ」

「もちちゃん。どこ？」

「そつだ、一人づつ名前言えばいいじゃない。わたしから右回りにね。じゃ わたしは、おんぶよ」

「あたしはあいこや」

「私、はづきよ」

「で、あたしがどれみ あれ？あたしの右どなりは？」

「わたし おんぶだけど」

「もちちゃん、おれへんやんか！」

「でも5人いるわよ。どうして??」

「ああ、とうとうみんな声まであたしだよ。もう誰が誰だかわかんないよあ!!」

あゝあ、やっぱりお姉ちゃんが最初に脱落かあ。でもあたしの顔で言わないでほしいなあ。

ため息ついてたら、別のあたしが、目をつぶった。

「ちいっちゃん てのひらは ネモフィラの・は・な

」

「こんなときに歌つてんのさ、おんぶちゃん!」
歌つていたあたしが、ちいさく、ふふふ、って笑つて

「どれみちゃん、正解。

そう。服も、髪も、声も、顔まで同じになったつて、この歌だけでわたしにはみんながわかるわ。だつ

て ね??」

「あ」

「そっか」

あたしは、うしろにいるあたしに、声をかけた。

「ほら、ももちゃんも歌って」

うしろのあたしは、ちよつと考えてから、歌いはじめた。はじめは小さく、だんだん大きな声で。

「ちいっっちゃナ てのひらは ネモフィラの
ハナ」

あつたかい歌。ももちゃんの、ハナちゃんへの気持ち
持ちが伝わってくる歌。みんなといっしょ、でも
みんなとちがうママの歌。

これがわかんなかったら、妹やめるよ、どれみお
姉ちゃん!!

「あ!」

「うん!」

「ふふ」

「よし」

「こみつけた!!」

四人のあたしが、あたしの後ろを見て笑ってる。そ

のまま、あたしじゃなくなっていく。魔法が、とけたんだ。

後ろから、あたしの肩にちょん、って手が乗った。振り向いてピースしたあたしをきゅ、って抱きかかえながら、

「エへ、みつかっちゃった」

—おわり—

しあわせ ももちゃん のこと

webの方には書きましたが、このタイトルはバクリです。何のバクリかと言うと、清涼飲料。そのまんまの名前のももジュースがあるのです。

通勤途中の自販機にある『しあわせ ももちゃん』。2001年の大晦日、初めてこのジュースを見たとき『次は絶対このタイトルにしよう!』と決めていたのですが、いざ書き始めるとう～ん　　なかなか『しあわせ』になってくれません。ただ、毎朝毎深夜(^_^;)眺めていて、ちょっとずつでも、書こう、って気になったのは確かです。どちらかと言うと、私の方が『しあわせ』にしてもらってるようなものです。

一応書き上げたいま、しあわせ、だよな?と問いかけて、うなずいてもらえるかどうか　　正直なところ自信はありませんが、ほんのちょっとでも首が動いたら、うれしいなあ、と思います。

ちなみに。「書いてるうちに、頭の中でぼっぶちゃんがひなた化してきちゃって　　」とか言ったら、果たして私は何人から殴られることになるのでしょうか? (^_^;;)

ン嫌いな子、いるし。人それぞれだヨね」
だからっ！

「そうじゃなくってっっ!!」

はっ、と口をおさえたけど遅かった。目の前にはびっくり目玉のももちゃん。どうしようか考えてたら、

「なに？はづきちゃん、どしたの？？」

どれみちゃんが飛び込んできて、ちょっとほっとした。

「ご、ごめんなさい。大きな声だしちゃって。

あのね、ももちゃん。3月3日なんだけど、私たちの場合、ひな祭りだけじゃないのよ」

ももちゃんの頭の上は？マークだらけ。ええと、なんて言おうかしら

「3月3日言ったら、おんぶちゃんの誕生日やんか。それが、どないしたん？」

声の方を向いたら、あいちゃんが、クッキーダネを器用に切りませながら立ってた。

「Wow♡そっか、じゃオマツリふたついつぱんだネ」

そう。それだけなら楽しく準備すればいいのだけども、

「あれ？だけど、たしか今年の3月3日って」

「みんな、なにしてるの？」

キッチンで考えてこんでた私たちは、突然声をかけられてちよつとびくつとした。振り向くと、片側にむすんだ髪が不思議そうにこつちを見る。

「ああ、おんぶちゃんが。ええとこに来てくれたわ。今年の3月3日って、おんぶちゃんコンサートやったんなあ？」

最初に声を出したのはあいちゃん。私もどれみちゃんたちも、まだ心臓がどきどきいつてるみたい。それだけ、みんな考えこんでいたんだわ。

「そつよ。今年はちよつと日曜だから、ってことで、マジオルカがバースデイコンサートを企画したの」

笑いながら、おんぶちゃんがそう言った。けど、

「そっかあ」

「困ったワ」

しょんぼりした顔のどれみちゃんとももちゃんを見て、おんぶちゃんが小首をかしげた。

「どうかしたの？」

そうよね。私だって、わけを知らなかったら不思議に思うし。

「バーステイパーティー、どうしようかって言ってるのよ」

私がそう言つと、おんぶちゃんやっぱりこり笑った。アイドルの顔で。

「あ、だったら はい、これ」

目の前に出てきたのは、おんぶちゃんのイラストが入った紙。

「コンサートのチケット。関係者用にすこしもらってるの。みんな、来てくれる？」

みんな、どんな顔したらいいのかわからない顔し

てた。私も、きつとそう。

「そら行きたいけど あたしらがもらってもうた

ら、あべこべやんか」

あいちゃんも、どう言つたらいいのかわからないみたい。さっきからずっと、口をとがらせてる。

「いいのよ。じゃ、みんなで来てね」

まだちよつと複雑だけど、こう言われたら仕方ないわ。行きたくないわけじゃないし。

チケットを受け取った私は、みんなに配っていった。どれみちゃんと、あいちゃんと、ももちゃんと

「え と、あら？」

チケットが、3枚。

「あ」

おんぶちゃんが困った顔をしてる。きつと、数まちがえちやつたんだわ。

「えへ ごめんなさい、間違えちゃった。 はい、あと1枚ね」

別のポケットから、くしゃっ、とした封筒が出てき

た。おんぶちゃんは中からチケットを取り出して広げながら、

「追加でもらった分だから、ちょっと汚くてごめんね。はい。じゃ、わたしは打ち合わせだから。またね」

パタパタ、って駆けだしてくおんぶちゃんと、手の中の手ケットを見比べながら、私はなにか変だなあ、って感じていた。

「おまえたち、おんぶを知らないかい？」

おんぶちゃんが帰ってしばらくした頃、キッチンの上の方から声がした。

「え？　げ、マジョルカ!!」

「なんでMAHO堂来んねん!？」

ももちゃんが不思議そうな顔でどれみちゃんを見て。　　いけない。　　つついイヤな顔しちゃって

るんだわ。いい思い出ないものね、私たちには。

「なにが『げ!』だい!?　　まあ、いい。おんぶがね、もう打ち合わせの時間だっていうのに来ないんだよ。」

おんぶの母親は別の打ち合わせでね。仕方ないからあたしが探しに来た、ってわけさ。で、おんぶをん?。」

マジョルカが、私のことを見てる。私の手もと手ケット?

「おまえ、その手ケットをどうしたんだい!？」

「え　あの、さっきおんぶちゃんにもらったんですけど　　」

マジョルカ　　こわい。

縮こまっていた私の前に、どれみちゃんが出てきてくれた。

「その手ケットが、どうかしたの?」

「それは、おんぶの父親のために特別に用意した席だよ。」

ええっ!!?

私はびつくりしてチケットを見なおした。ほんとう。このチケット、特別席のだけわ。ほ

「おんぶちゃんの、お父ちゃんの方」

あいちゃんの声でまわりを見たら、みんなが私の手もとを見ていた。

「これ、もらえないよ」

どれみちゃんの声に、私はただうなずいた。そうよ。これもらっちゃったら、もう友達だなんて言えないわ。

「とにかく、これ返そうヨ」

「せやな。誰が行くかは、あとでクジでも作って決めたったらええねん」

オホン。と上からセキばらい。

「どうやら、一度ここに来てすぐ出ていったようだね。しかたない、他をあたるとするかね」

じゃ、チケットを返しておくね。あとでおんぶに

渡して」

私の目の前に降りてきたマジョルカがそう言いかけたところで、MAHO堂の入り口が爆発した。

「うん。爆発したみたいだに思いつきドア開けたんだわ。」

びつくりして見てみると、ショーケースの向こう側でおんぶちゃんがにらんでる。

「マジョルカ、なにやってるのよ!」

私はチケットを握りしめて、キッチンを飛び出した。

「あの おんぶちゃん? これ」

差し出したチケットを見て、おんぶちゃんが困った顔してる。なんて言おうか考えていたら、後ろからどれみちゃんが言ってくれた。

「ごめん。聞いちゃったんだあ。お父さんの分なんでしょ? これ」

おんぶちゃん、ちよつとだけ下を向いてから、すぐ顔を上げた。

「あ、ああ、そうね。それじゃ、ひとりだけ別の場

所になっちゃうわね マジョルカ、もう一枚持っていない？」

笑ってる。けど、違う。

「そういう問題じゃないよ！なんで、お父さんあげないのさ!!」

「どれみちゃんが、体当たりするみたいに迫ってたけど、

「いいのよ」

おんぷちゃんは、ただ笑ってる。

「いい、って」

「もついいの。今年はパパ、休めるはずだったんだけど、急にお仕事入っちゃったんだって」

「やっぱり。おんぷちゃん、心配なことあんまり話してくれない。以前よりは話してくれるけど、どれみちゃんやあいちゃんみたいには、まだ

「2日の夜行で札幌に行って、戻ってくるのは4日の朝だって。お祝いは1日遅れになっちゃう、って言った」

私のとなりに来たあいちゃんも、同じこと考えてるみたい。とつても心配そうな顔。

「それじゃ ほら、マジョルカ！いくわよ」

マジョルカを握るようにして出ていったおんぷちゃん。そのあとを、私たちはしばらくじっと見つめていた。

なにか話そう、としても、うまく言葉が出てこない。どうしようか考えながら、ちよつととなりを見たら、泣きそうな顔のあいちゃんが目に入った。

「あいちゃん？」

「ももちゃんとどれみちゃんが振り返った。あいちゃんは私たちをひとりひとり、じっと見てから、ちよつとつむいて、

「うん。あんな、おんぷちゃん、さつき出てっから戻ってくるまで、何してたんやるなあ、考えてん。」

そしたら、そしたらな。なんて考えても、あの線路の上の橋から、電車ながめてる姿しか見えてき

へんねん
「

次の日はもう3月。MAHO堂のキッチンでケーキ作りをしている私たちの中に、おんぷちゃんはやっぱりいない。

「あさつて、だネ」

ももちゃんが、スポンジにクリーム盛りつけながら、ぼつん、と言った。

「おんぷちゃんのお父ちゃん、明日の晩からおれへんねやな」

あいちゃんが、クリームの上にイチゴをのせながら、ぼそぼそつ、と言った。

「きょうは学校もお休みしてて、話もできなかったよね」

どれみちゃんが、その上から煮とかしたアメをかけるながら「え？煮たアメ!？」

「あちちちちッ！　くおら！どれみちゃん何しとんねん!!」

「ごめん、ごめん　つて、あいちゃんこそ、イチゴをケーキに押し込んでどうすんのさ」

「ええっ!?　　なんや、ももちゃんがイチゴの上からぬりたくってんやんかあ」

「ワタシ、順番どおりにやってるじゃない。ぬりおわる前に作業するふたりがワルイ!」

あ、ああ、もう

「ね、ねえみんな。そんなツンツンしなくても」

つて言ったとたん、三人がくるつと振り向いて、

「はづきちゃん、さっきから何もしてない!!!」

ハモられちゃった。そういえば、私、ぼつとしてたみたい。

「あッ！もうやめ、やめやー!」

「そつネ。こんなんじゃ、ケーキなんてできないワ」

ももちゃんはそう言いながら、クリームとアメでゴテゴテしたケーキ台を冷蔵庫に押し込んだ。あい

ちゃんは手早く道具を片付けてる。私もお皿を受け取って、流して洗った。

「ゴシゴシ。」

「キュッキュ。」

気が付いたら、同じお皿を洗ってはふいて、また洗ってはふいてた。あいちゃんも、もちちゃんも、そこそ動き回ってるけど、よく見ると同じことくり返してる。

「ねえ」

そんな中、テーブルの上から声がした。いままでつぶしてた、どれみちゃんだ。

「したいよね、パーティ」

「せやな」

あいちゃんが、まるで夢見るみたいに言った。

「パーティ、したいよね」

「うん」

もちちゃんが、目をきらきらさせて言った。それから、みんなが私を見た。うん。わかってる。

「私もこの間してもらったわ。おんぶちゃんだけなしなんて、絶対いやー!」

1日ぶりに、みんな笑った。

「せやけど、どないすんねん? おんぶちゃんのコンサート、夕方からや。仕事終わったら夜やで?」

「そつネ。おんぶちゃんの家はもちろんだメだし、M A H O 堂で騒いでたら、怒られちゃう」

またみんなの笑顔がたてジワに代わりそうになっ
たとき、

「夜、か え? 夜!?!」

どれみちゃんが、すっとんきような声を上げてとびはねた。

「ど、どつしたの?」

「はづきちゃん! 3日って、月、出る!?!」

いきなり聞かれて、私はとっさにキッチンの奥を見た。

「お月さま？ええと 出るわよ。月齢18だから、満月よりちよつと欠けたのが出るわ」

MAHO堂のカレンダーには、毎日の月齢がちゃんと書いてある。だって あー！

「んむ。それなら、なんとか行けるじゃろ」

見上げた先には、チリトリが浮かんでいた。

「マジヨリカー！」

みんなビクツとした。キッチンでおしゃべりしてるんだもの、すぐカミナリが落ちてくる はずなのに、今日はなにもなかった。

「行くつて あ、ひよつとシテ、魔女界？」

ももちゃんはマジヨリカのカミナリあんまり知らないから、けつこう平気みたい。

そつとみてみると、マジヨリカ、むつつりだまっちゃつて、私にはなんか不気味。でも、どれみちゃんももうすっかりリラックスしちゃつてる。

「そつー！あそこだったら、夜中にさわいだって問題なつし」

「今のおまえらなら無断で行っても問題ないじゃろ。じゃが騒ぐつもりなら、話だけは通しとかんといかな」

なんか、すつこく不気味。

「な、なんや、珍しなあ。マジヨリカが反対しないなんて」

あいちゃんも私と同じだったみたい。顔がいやがつてるわ。

「仕方ないわい。おんぶに元気がないので、売り上げが落ちるんじや」

ふいつ、て横向いたマジヨリカを見て、私にもやつとわかった。だって、おんぶちゃんほんとに元気がないときは、かえつて心配したフアンの人が寄つてくれるんだもの。

「よし。会場はわしがなんとかしよう。その代わり わかつとるな？」

ジロつとにらまれても、もつへいき。みんな、わかつてるから。

「いい、いい！お店はあとでいっぱい頑張っちゃうから!!」

「よっしゃ決まりや！準備、はじめたるー!」

3月2日。きょう学校はお休み。MAHO堂もお休み。すごく静かなMAHO堂で、私たちは、パーティの準備をしていた。飲みものにお菓子、お皿にお箸にコップにスプーン。それから、それから

あ!!

「いけない！パーティのこと、おんぶちゃんに言っていないわ」

どうしよう 考えていたら、しきものを探してたどれみちゃんが顔を上げた。

「しようがないよ。ずっと練習で、会えてないんだから」

お菓子を作ってるももちゃんも、ゼリー型を洗い

ながら振り向いた。

「それに、きつといまはコンサートのことであたまイッパイだよ。終わってからにしヨ」

そ、それもそうね。ちょっと落ち着きましょ。

ああ、本当に静か すぎるわ、よね。

「それよりさ、マジヨリカたち、遅くない?」

そうそう。マジヨリカとララ、きのうの晩に魔女界におでかけして、まだ戻ってないんだわ。

そう思っていたら、奥のほうから、キィって音がした。二階で探しものしてるあいちゃんが降りてきたのかしら?

「ふあ ただあいまあゝ」

扉の向こうからは眠そうな声。小さな体がふわふわ飛んできた。

「あ、ララ」

「ララ、おかえリィ あし?」

ももちゃんが、不思議そうな顔で扉を覗き込んだ。

私も見てみると、ララの後ろから、疲れた顔のマジヨ

リカがゆつくりただよってきてる。

「マジヨ リカ？」

チリトリの上でチラッと見て、そのままゆつくり二階に

「ちょ、ちょっとマジヨリカ。会場のほうはだいじょぶなの？」

どれみちゃんの声に、チリトリがすうっと降りてきた。マジヨリカはごろん、とあお向けになって、「あ〜？うんむ 会場はちゃんと都合つけたわい。そっちはいいんじゃないかな」

つて言つてまま、また浮かびはじめた。そこにちょうど二階から降りてきたあいちゃんが、

「まさか、また余計なことしたんちゃっやるな？」

言つたとたん、カミナリが落ちた。

「わっしやそんなことせんわい！」

デラじゃ、デ・ラ！！

キーン

「デラが、どつかしたの？」

耳が痛い。けど、やっぱり一番つきあいの長いどれみちゃんは立ち直りが早いわ。

「どこで聞き違えたのかは知らんが、『人間の珍しい祭り』なんぞと魔女界中に触れ回りおつたんじゃ。おかげでどこへ行つても、参加したい連中がわんさと押し寄せてのお」

「それやったらコンサートの続きになってまうやないか。おんぶちゃん、疲れてまうで！」

階段の途中から、あいちゃんがマジヨリカをわしづかみにした。おんぶちゃんが嫌がることだと、あいちゃんもこわいわ。

「わあつとるわい！ じゃが、魔女ガエル村だけならともかく、あるうことが元老の方々にまで、ぜひにという方が出てくる始末じゃ。もうもう」

「最後は女王様にまで泣きついて、代表一人だけ、つてことで、やっとまとまったのよ」

ララがようやくチリトリまでたどりついて、ふう、

と腰をおろしてた。こんなに疲れてるララ見るなんて久しぶり。きっと、魔女界はほんとに大混乱だったんだわ。

「どうする？」

どれみちゃんがみんなの顔を見回した。そうねえ、知らない人といっしょはあんまり だけど。

「ん〜 ま、押しかけるんはあたしらの方なんやし、2人くらいならしゃあないんちゃう？」

あいちゃんがそう言つと、みんなうなづいた。

「でさ、誰が来るの、マジヨリカ？」

「さあてな。わしが知っているのは、人数が決まったところまでじゃから もういいじゃろ？ わししゃ寝るわい」

ふわふわ。二階へ昇っていくチリトリの後ろで、ララの小さな手がひらひらゆれていた。

「知ってる魔女さんだといけど」

それを見てたら、つい口から本音がこぼれちゃった。決まったのララ、いま心配してもしようがないヨ。

それより、準備しつかりやらなきゃネ」

ももちゃんがボンって肩たたいて、その勢いでみんなまた動き出した。さあ、あと1日！

3月3日は日曜日。夕方からは、おんぶちゃんコンサート。でも、私たちはまだMAHO堂にいた。作りおきできないお料理だけは、直前につくらくつちゃ、ね。うす〜い、クレープみたいなたまご焼き。一枚づつ、くつつかないようにキッチンペーパーにはさみ込んで、つと。うん。

「できた あいちゃん、どう？」

私がかかるつと振り返って、キッチン奥を見てみると、あいちゃん、あわてて何かかかえ込んでた。

「あ、あとちよつとや」

あら？ いつもだったら、もう終わってるのに

「そう ？」

テーブルの上には、できあがったお料理が並んでいる。ええと、私の薄焼きたまごに、おませご飯。あとはお海苔に紅しょうが。絹さや、にんじん、うずらの卵。他に足りないものって、あったかしら？

「ん、もうちよつとやから。あ、はづきちゃん、それ、包んでてくれへん？」

「いいけど」

「なんかあいちゃん、様子が変。私に見えないようになにかやってるわ。なにかなあって、のぞいてみようとしたら、」

「あ、はづきちゃん、あいちゃん。お菓子もできたよあ」

「って言いながら、どれみちゃんが飛び込んできた。よくわからナイけど、これで、いいノ？」

その後ろからは、ひなあられ持ったももちゃん。キャンデイマシンで作ったのね。マジョリカに見つかる前におそつじしとかなくちゃ。

「どれどれ？　ん。上出来、上出来！」

ぱつと飛び出してきたあいちゃんが、ももちゃんのひなあられ食べてる。なんかごまかしてるみたいだけど、私はもう気にしないことにした。あいちゃんだものね。これがどれみちゃんだったらちよつと心配だけど

「ねえ、みんな！」

どれみちゃんの声に、思わず飛び上がった。

き、聞かれてなかったわよ、ね？

「どしたの、はづきちゃん？」

「ま、いいや。みんなさ、おんぶちゃんへのプレゼント、決めた？」

「そらまあ、とりあえずやけどな」

私も、とりあえずよね。うんうん、ってうなずいて横をみたら、ももちゃんがちよつと考えこんでる。

「おんぶちゃんへのプレゼントって、難しい」

あら？意外だわ。

「ももちゃん、パーティー慣れるから、きつとプレゼント選ぶのじょうずだと思ったのに」

私が言い終わるまえに、ももちゃん軽く首をぶった。

「ううん。きつとワタシが何あげても、おんぶちゃん笑って受け取ってくれると思うヨ。でもサ、どうせなら本当によるこんでくれるモノ、あげたいよ。おんぶちゃんによるこぶもの、って、なんなのカナ??」

おんぶちゃんが、本当によるこぶもの、かあ

「なんとなくなら、わかるんだけどな」

そうね、なんとなくなったら、私にもわかるよ
うな　あら?　なんか、「コゲくさい?」

「あ〜っ! キャンディマシンがケムリふいてる!!」
あ〜あ、やつぱり。

でも、かけだしてる二人の背中を見てたら、ちょっと不安になった。

おんぶちゃんの誕生日、ほんとに、これでいいのかな、って。

コンサートが始まった。ステージの上では、おんぶちゃんが歌ってる。

おどりながら。笑いながら。いつもと違う歌をうたってた。

包み込むようなあつたかい笑顔で。

子リスみたいにちよこちよこ。

明るく、強く、いっぱい元気に。

跳ねるみたいにはしゃぎながら。

そして、いつものいたずらっぽいやつをおどらせて。

「　　なんか、誰かに似てるわ」

そう、ひよっとするとあの中には、私もいるのか
もしれない。

私も、おんぶちゃんの一部にいるのかもしれない。

そう思ったなら、なんだか私のほうがプレゼントを
もらったような気がした。

長いはずのコンサートも、あつという間にフィナーレ。

手を振りながら幕の影に消えていくおんぶちゃんを拍手で送りながら、私は決めた。おんぶちゃんのパパの分まで、めいっばいお祝いしよう、って。

「よあし、あとはパーティよ。いっばい盛り上げなくちゃ!!」

あら？

『おっっ!!』 っ、いつもなら言ってくれるのに、何にも反応がないわ。

なぜかしら? って振り向いたら、すぐそばにいたはずのみんながいない。そのかわりにちよつと離れたところから

「は、はづきちゃんが燃えている」

どれみちゃんたちひどいいい。引かないでよおお。あ。

「そんな泣きそつな顔せんと。さ、ファンの波が引いたら、さそいに行こか」

あいちゃんに背中押されながら、私たちはおんぶちゃんの家に向かっていった。

「あ、来た来た」

おんぶちゃんの家のおそば。ハムスターになった私たちの前に、いつもの白い車が停まった。

「さ、みんな、行こー!」

どれみちゃんのお合図で、降りてきたおんぶちゃんに近づこうとしたそのとき、

「みんなストォ〜ッブ!!」

目の前で両手を広げたまもちゃんに、おもいつきりぶつかった。

「な、なに??」

おでこ、痛い。さすりながらももちゃんを見ると、なにか指さしてる。その先にはおんぶちゃんの家、そして、その中から出てきた人に、おんぶちゃんが飛

びついた。笑顔で。

「おんぶちゃんの、お父ちゃん!」

そうだわ。私も会ったことある。でも、たしか今日は帰ってこれないって

「だれか魔法使ったの??」

どれみちゃんの声に、私もみんなもふるふる、って首を振った。そうよね。パパのお仕事じゃまるなんて、おんぶちゃんが一番きらうことだもの。

「それじゃあ」

みんながおんぶちゃんを見た。パパにだっこされた、おんぶちゃん、コンサートのときも、MAHO堂にいるときとも違う。まるでちっちゃい子供みたい。

「ほな、行こか」

青いハムスターが、くるつと後ろを向いて歩き出した。

「エ?」

黄色いハムスターが、まるい目でそのつしる姿を

見つめてる。

「会場はおさえちゃったもんね」

赤いハムスターが、なんか頭をかきながら歩き出した。

「魔世界の代表のひとつまで来るんですもの。ちゃんとやらなくちゃ」

オレンジのハムスター「私」は、うんうん、ってうなずいてから歩き出した。

「そっか。そだね。それじゃ、ヒナマツリだけでも、みんなでやろ!」

最後に黄色いハムスターがそう言って、みんなのあとを追いかけた。

曲がり角の影でもとの姿に戻る前に、私はもう一度だけ、おんぶちゃんの顔を見た。

私のお祝いは、もういらなんだわ。そう思えたのがちよつとさびしいけど、でも、なんだかほつとした。

「わあ♡ 桃の林だあ」

マジヨリカのあとについて魔女界を飛んでた私たちは、いつの間にかたくさん桃の木の中にいた。

「ひな祭りは桃の節句じゃからのあ。どうじゃ？ ぴったりじゃろ？」

私は感激して声が出なかった。どれみちゃんはすごくはしゃいじゃって、

「うん、すこい、すこいよ、マジヨリカー！ でき、

おひなさま、どい？」

「そつこまで面倒見きれるかあッ!!」

「ケチ」

あゝあ。ひと言多いのはいつものことだけど、今回はちよつとマジヨリカかわいそう。

「ぬわんじゃとー…ッの…!!」

「まあまあ。おひなさんなら、ちゃ〜んと人数分あんで」

マジヨリカの前に回りこんだあいちゃんが、にこ

こり笑って言った。

「え？ 人数分??」

どれみちゃんとももちゃんはきよんととしてる。そうか、あいちゃんとしか話してなかったせいね。

「うふふ。ついでからの楽しみよ」

「お、来たようだね」

たくさん桃の花のなかに、おっきなテーブル。そのそばには、見なれた白衣のひとがいた。

「あ、マジョハート先生」

「先生が魔女界の代表なんですか？」

ほつきから降りた私たちを見渡してから、マジョハート先生がうなずいた。

「まあね。あと、もう一人」

「邪魔をするぞ」

桃の木のかげから、もうひとり。そのとたん、マジヨリカが飛び上がった。

「マ、マジヨリードさまー！」

久しぶりに見たわ。緊張してるマジヨリカなんて。

「人間界の、それも日本の祭りとあつては、他の者にはゆずれないからな。ま、邪魔する代わりといつてはなんだが、手土産をもつてきたぞ」

マジヨリードさん、ふるしきをテーブルの上で開いて、中のものを並べはじめた。

「ひし餅に あられに 甘酒。人間界から持ってきていた本を元に再現してみた。モモコ、これでどうだ？」

惜しいわ。もうちよつとで完璧だったんだけど。

「あたしも初めテだけど あいちゃんに教えてもらったのと、ナンカ違う」

「なに？どいどい？どいどいがちがつ？」

がぼつて、音がしそつなくらいの勢いで、マジヨリードさんももちゃんの肩をつかんだ。けど、ももちゃん考え込んでる。

「あの、あられだけ、違うんですけど」

かわりに私が答えたら、仮面の顔がくるつと振り

向いた。

「ひな祭りには、ひなあられじゃないのか？」

「ひなあられは、甘いあられのことなんです。これは、普通のあられ」

「これが、ひなあられです。 どうぞ」

どれみちゃんが差し出したひなあられを、マジヨリードさん、ぼつの悪そうな顔で受け取って、

「そ、そうか。うむ、勉強になる。来た甲斐があったというものだ。なあ、マジヨハート」

「まあ、そういうことにおこつかね」

やれやれ、っていう感じのマジヨハート先生が、マジヨリードさんから渡されたひなあられを、ぼりぼり。

「なるほど、ほんのり甘くてとても軽い。ふわふわしているけど油も多くない、か これは離乳食にもよさそうだね。あとで作り方教えとくれ」

私たちみんな、顔を見合わせておもわず笑っちゃっ

た。マジョハート先生ちつとも変わってない。いつでも子供のことを考えてるのね。

「さあ、そしたらみんな座ってや。マジョハート先生も、マジョリードさんも座ったってください」

パン、パン、って手を叩きながら、あいちゃんが声をかけた。私もテーブルのそばにあったお座布団にすわるうとしたとき、服のすそが、ツンツン、って引つ張られた。振り返るとどれみちゃんが、「でさ、はつきちゃん。おひなさまは？」

あ、いけない。

「あ、いま作るから。ちよつとまっててね」

「え？作る??」

私とあいちゃんは、持ってきた荷物の中から材料を並べて、さいごの仕上げ。おませごはんを軽く三角にむすんで、薄焼きたまごでくるんであげて。甘いにんじんは細く切ってつけて、うずらのたまごは楊枝でとめて、上から紅しょうがでちゃん、ちゃん、ちゃん

「あ、ひなちらしだ」

絹さやとお海苔で飾りをつけて はい、完成。

「Wonderful! おひなさまオニギリね?」

「おにぎりちゃんねん。ま、あとで食べてみ」

作ったひなちらしを分けて、っと

「これがマジョハート先生の分、こつちがマジョリードさん マジョリカとララは二人で一組ね?あと、どれみちゃん、ももちゃん、あいちゃん、私、と。これで全部ね」

ふう、って息ついて座ろうとしたら、下から小さな声が出た。

「□□、□□□□! □□□□□□!」

え? □□□□、って まさか!

「□□?!」

思わずあいちゃんとハモっちゃった。

「□□、あんたおんぶちゃんといっしょやなかったんか?」

いつの間にか、あいちゃんと私の間に小さな妖精

がいた。あいちゃん言葉に、こっくり。ちっちゃな体がうなづいてる。

でも困ったわ。レレも他の妖精たちも、みんな私たちの代わりに寝てもらってるから　そう考えていたら、口口がふわふわテーブルの上に乗っちゃって、私のひなちらしを指さした。それからあいちゃんと私に向かって、なにか話しかけてる。

「ん？　なんや??」

「ひなちらしが、どうかしたの?」

からだを振り回しながら、なにか訴えてる。

うん、レレの言ってることならはつきりわかるんだけど、え〜と

「なあに?　ええと　『おんぶちゃんの分を　置

け』?」

「『置け』って、あんなねえ」

となりから、どれみちゃんがつっこんきた。けど、口口は気にしてない。

「『いいから置け』?　わかったわ。材料足りなくて、

あたまの部分がないんだけど　はい、じゃこれ」

口口は、うんうん、ってうなづいてから、ひなちらしの前で落ち着いちゃってる。食べるわけでもないみたい。変ねえ。

「そういえば、一人足りないようだが、どうした?　今日の主役ではないのか?」

いきなり声が出て、ついビクツとしちゃった。マジヨリードさんには、やっぱり慣れないわ。

「　それって、おんぶちゃんのこと?」

ももちゃんは平気みたい。えっと、なんだっけ。おんぶちゃんがいなくて、今日の主役で　え!?

「なんで知ってるんや??」

うんうん。おんぶちゃんの誕生日を知ってる魔女なんて、マジヨリカとマジヨルカくらい

「一昨日からオヤジデーがうるさくってね。あたしは、てっきり誕生日を兼ねてやるもんだと思ってただけど?」

マジヨハート先生が苦笑い。そういえばオヤジ

デがいたんだったわ。

「おんぶちゃんのお父さんが帰ってきてきてさ」

どれみちゃん、それだけ言っただけで下向いちゃって。みんなもなんだか言いたくないみたい。あとは、私、ね。「おんぶちゃんのパパは忙しいから、いつも、とおいそらの下にいます。」

おんぶちゃんのお誕生日に、帰れないはずなのに、ちゃんと帰ってきて、それで、おんぶちゃんのうれしそうな顔見たら、なんだか、私たち、じゃまみたいな気がして

「いけない、って思っても、やっぱり下向いちゃう。」

「そうかい？」

やさしい声だった。私たちみんな、ぱつと顔を上げた。とおい目をしたマジョハート先生がいた。

「あたしなら、遠い空にいる子供にいま会えるとしたら、そこでできた友達のことを、邪魔だなんて思わないよ」

とおい目の先にいるのは、きつとマジョハートさん。

「親つてのは子供の幸せを夢見るもんさ。子供は迷惑かもしれないけど、ね」

そう言っただけで、なんかテレクさそうに、にやにや笑った。けど、さっきのマジョハート先生はママだった。私たちよりもっと、ずっと、いろんな経験をつんだママだった。

「なに話してるの？」

後ろからいつもの声があざねてきた。私はなにも考えずに

「おんぶちゃんのパパのことよ。おんぶちゃん、そこまで言いかけて、あれ、って思った。今の声、だれ？」

振り向いた目の前には、むらさきのブーツ。

「え？　えええっ!？」

「夜中なんだから、大きな声出さないで」

むらさきのスカートにぼつし。片側からびゅんって飛び出た髪のはば。

「だ、だって、だってだって　なんでおんぶちゃんここに!?!」

おんぶちゃん、ただにっこり笑って、私のほうにきた。テーブルの上では、ロロがくつろいでる。

「ロロ、ロロロ」

「ありがと、ロロ。そこがわたしの席ね」

そのまま、私とあいちゃんの間座った。さっき、『おんぶちゃんの分』って置いたひなちらしの前に、
って、ことは。

「あ〜っつ! ロロ、あんたおんぶちゃん来んの、知ってっただんやな!!」

ロロはおんぶちゃんの肩の上で、あさっての方を向いてる。まちがないわ。もう。

「わたし抜きでパーティなんてするから、ロロが知らせてくれたのよ。ね、ロロ」

「ロ〜ロ〜」

とぼけた顔しちゃって。

「じゃが、MAHO堂は戸締りしてきたはずじゃ。どうやって??」

「あれよ。あれ」

おんぶちゃん、上を指さした。見上げてみてみんなちよつとの間、言葉が出なかつた。

「これって　まさか、女王様の、馬車!?!」

どれみちゃんが、なんとか言った。ももちゃんもあいちゃんも、まだ口開けたままだわ。

「そ。MAHO堂まで迎えに来てくれたの。プレゼントはできないから、そのかわりなんだって」

そっか、女王様がひいきしちゃういけないものね。

「では、我々はこの辺で失礼しよう。マジヨリン、乗せてくれ」

後ろでマジヨリンさんの声がしたと思ったら、馬車が降りてきた。

「『ひな祭り』はもうお開きでいいだろう?」

あいこ、『ひなあられ』の作り方、今度教えとくれ」

テーブルの近くに降りてきた馬車に、マジョハート先生も乗り込もうとして 片足をかけたまま、ちよつと振り返った。

「ああ、そうそつ、おんぶ。『遠い空』と『近い空』、どつちが大事だい？」

「え？」

おんぶちゃん、目をおおきく広げてマジョハート先生を見つめてる。先生はにやにやしながら、私たちみんなを見回してから、またおんぶちゃんに向かつて、

「答えておやりよ。じゃあね」

扉が閉まると同時に馬車が昇っていつちゃって、気がつくとき、ここには私たちだけになっていた。

桃の花が、風にゆれてる。

「とおいそらと、ちかいそら、か」

おんぶちゃんが、私たちのほうを見た。みんな、ひとりづつ見てから、ふう、と息をついたと思ったら、いきなり、うーん、ってからだを伸ばしてちよつと

あくびした。

やっぱり、疲れてるんじゃないかしら。コンサート終わって、パパやママとパーティーして、こんなよる遅くに

「だいじよぶ、おんぶちゃん？」

わたしが思わず声をかけたら、

「なにが？」

からだを伸ばしたまんま、きよとん、って顔で言われて、すぐに答がでなかつた。えつと

「ああ、もうええわー！」

なにかあきらめたみたいのため息ついてから、あいちゃんはポロンを取り出した。

「パメルクウ、ラルクウ」 ふかふかベッドよ、出ろっ!!」

ボンッ、つとでてきたのは あいちゃん、なにを参考にしたのかしら。屋根つきのハテナベッド。

「なんか エッチっぽい」

言っちゃってから、はつとしたけど、もう遅かった。

「はあ〜つきちゃあ〜ん??」

ああ、みんなニラんでる、ニラんでるごう。

「ごめんなさい。もう言いません」

おんぶちゃんがぐすくす笑ってる。つられて、みんなが笑った。なんか複雑な気分だけど、わたしも笑った。やっと、みんな普通になつたんだもの。

「おんぶちゃん、もう余計なこと言わへんから、きつうなつたら素直に寝えや」

にっこりなずくおんぶちゃん。それはもう、いつものおんぶちゃんだった。アイドルじゃなくて、いつも私たちといっしょにいるおんぶちゃん。

「それじゃ、Let's Party!」

ももちゃんが声をあげて、みんなまた席についた。食べ物はまだいっぱい。ケーキはないけど、マジョリードさんのひしもちを真ん中において、ジューズで乾杯しようとしたとき、

「どわあああ〜っ!」

どれみちゃんのすごい声がひびいた。

「ど、どないしたんや?」

「プレゼント」

あ!

「プレゼント、みんな置いて来ちゃってるよ!!」

そう、おんぶちゃん来るなんて、思ってたから。でも、

「なに言ってるのよ。プレゼントならいっぱいあるじゃない」

そう言っつて、おんぶちゃんはちよつといたずらっぽく笑った。

「たとえば ほら」

「わ、見たあかん!」

あいちゃんの席の下から、ひよい、つとなにかを取り出した。食紅で目とくちと、あと片方にくるとかみの毛を描いたうずらのたまご。

「やつぱり。これって、おんぶビナね」

「あ、あは、あははははは いや〜最初はなんの気なしに作ってたんやけどな、いざ出来上がつてみ

ると、なんやテレくさなつてしもてな。」

「真つ赤になりながら言うあいちゃんに、

「ん。ありがと」

つておんぶちゃんが言うつと、ますます真つ赤になつた。

みんなが笑つてる。その顔を、ひとつひとつ、おんぶちゃんが見つめてた。

「ね、みんな。とおいそらにいる人の方が、ちかいそらにいる人より、大事なかな？」

あ、マジョハート先生の、言葉。

「わたしはね、とおいそらにも、ちかいそらにも大事な人がいる、つて言えるの、ステキだと思つ」

そう言つて、ちよつと舌を出した。そっか。うん、そうね。大事だつて言える人がいる。それはとつてもうれしい。どつちが大事じゃなくつて、大事つて

言えることがうれしい。

みんなの視線がなんとなく集まつた中で、おんぶちゃんはまたおっきなあくび。

「おんぶちゃん、無理したあかんで」

「うん ちよつと、疲れたかな」

おんぶちゃん、あいちゃんのひざに、ころん、つてねころんだ。

「ベッドあるやん」

「ここでもいいのよ」

「せつかく出したんに」

ぶつぶつ言つてるあいちゃんの下で、

「ここがいいの」

小さな声が、たしかにした。 とりあえず、聞

かないふりしておきましょ

ふたりからそらした目の先で、どれみちゃんとも

もちゃんがやつぱり赤い顔してた。私が口の前に人

さし指をたてたら、ふたりはうんうん、つてうなづ

いて、そのまま何もなかつたみたいにおしゃべりを

しはじめた。

「でも、やつぱりプレゼントないの、チヨット」

「そうだよね。なにかないかな？」

それもそうね。おんぶちゃんが寝てるうちになにか　って、あいちゃんのひざで寝てる姿見てたら、いいこと思いついちゃった。

「私にまかせて。

ハイパイポーンポイ　リボンよ、出てっ!」

「ぼんっ、と出てきたリボンをポロンで動かして

「え、な、なんや!」

「じつやって、じつはちよつちよにして　　っとうん。できた

「ね、どう?」

「Wow」

「ラッピングあいちゃんだ♡」

「大事な人、だものね。」

「くおらープレゼントって、あたしかい!!」

「よしっっ!!」

「うるさくしたら、おんぶちゃん起きちゃっとうん」

「うんっ!」

「ああ、怒ってる怒ってる。」

「ったく　おんぶちゃんが目えさます前に消さんと、ほんま承知せえへんで!」

「みんなでうんうん、ってうなずいた。けど、ふたりとも目があっかんべーしてる。　　きつと、私もしてる。ごめんね、あいちゃん。」

「いまは、まあ、ええけどな　　」

「くすくす。私もみんなといっしょに笑っちゃった。ひざまぐらのおんぶちゃんは、いつのまにかあいちゃんのほうに向いて寝てる。」

「それに、腕であいちゃんの体かかえて、ちよつとだけ見える顔もなんだかうれしそうだし。」

「じつと見てたら、声が聞こえてくるような気がして、私はちよつと顔が赤くなつた。そう、きつと、聞こえてくるのはこんな声だから。」

『うふふ　今日は、わたしの』

—おわり—

とおいそら・ちかいそら のこと

3/3のおんぷちゃん's パースディ記念小話です。 と言って
も、Ver.1.0をweb上に上げたのはパースディの約一ヵ月後(本書
はVer.1.1です)。言い訳できません。はい。ごめんなさい。

あいちゃんのパースディ話(あきのいちにち)と違って、主役が
ほとんど出てこない、ヘンな話ですね。正直なところ、おんぷちゃ
んのセリフは最初にざっと書いた時点からかなり削っています。あ
まり話すと、ヘタなボエムもどきになりそうでしたので この
辺をうまく処理できると、もう少し違った書き方になるのでしょ
う。修行が足りません。

ちょっとだけ内容のフォローを。マジョリドさまの作ったひな
あられ、実は、間違いじゃないかもしれませんが。ひなあられの作
り方をweb上で調べまわっていたときに知ったのですが、関西の
方では甘いひなあられだけでなく、しょうゆ味やチョコがけし
たひなあられもあるそうです。

話がそれすぎるので、書きませんでした。マジョハート先
生に『ほのかに甘い』と言ってもらっているのは、実はその名残
りだったりします。お菓子指導したあいちゃんにとって、関東風の
ひなあられでは『ベタ甘』のはずですからね。

最後に言いわけを。Ver.1.0書き上げた時点では、「ドッカ〜！」
の第5話『素顔のおんぷ』は見えていませんでした。後で見て、う
わぁ〜と思ったときには後の祭り (^_^;)

あとがき

どれみ本4冊目で、ぷにけっと初出場合わせです。本来私は、ここにいるべき人間じゃないような気がします。好きなんだから仕方ありません。もう開き直りました。石投げられるくらいは覚悟です。矢でもテッポでも持ってきてください。逃げますから(^_^;)

さてこの本、本当は3月に作成予定だったのですが、状況と能力に問題がありまして、二ヶ月の延期。やはり修行が必要なようです。

遅れたために、「ドッカ～ン」のド真中の時期になりましたが、まえがきに書きましたとおり、やっぱり「も～っと!」です。実はこれ、単に遅れたからだけじゃなくて

「も～っと!」終了から「ドッカ～ン」まで間がある。

そこなら大きなハナちゃんを考えなくていい。

ラッキー

が本音だったりするからです。情けないことに(-_-;) 難しいですよ、大ハナちゃん。

もっとも、いつまでも避けてはられません。次に書く話(まだ書く気です。はい)ではなんとか頑張ります。

では最後に、この本を手にした(手にしてしまう方も含めて)すべての方に感謝の意を表しつつ、この拙文を終わらせていただきます。